

韓国のメディア・ジャーナリズム関連研究の動向：2016年度

小林 聡明*

はじめに

本稿は、2016年度（韓国：2016年3月～2017年2月）に韓国言論学関連分野の主要三誌に掲載された論文すべてを抜き出し、簡単な内容紹介を附したものである。なお、主要三誌とは、『韓国言論学報』（韓国言論学会）、『韓国言論情報学報』（韓国言論情報学会）、『言論と社会』（社団法人言論と社会）である。これらの雑誌の位置づけなどについては、拙稿を参照していただきたい（「韓国の言論学関連学会の状況と研究動向の概要：2015年1～12月」『ジャーナリズム&メディア』9号、日本大学法学部新聞学研究所、2016年3月）。

2016年度の主要三誌に掲載された論文は、外形的な意味において、いくつかの特徴を明確にしている。第一に、歴史的な観点や哲学的アプローチの研究が少なく、オンライン調査などを用いた実証的な研究が活発に行われていることである。第二に、既存のマスメディアだけでなく、ソーシャル・メディアにもバランス良く目配りされた研究状況の広がりを見取できることである。第三に、日本のメディア・ジャーナリズム研究との顕著な違いとして、韓国の場合、複数の著者が共同執筆した論文が多く見られることである。

本稿では、内容面からの傾向整理などは、あえて行わなかった。それは、すべての掲載論文を紹介することで、読者の観点から傾向を見出してほしいという願いが込められているからである。以下、三誌に掲載された個別の論文について見ていきたい。

1. 『韓国言論学報』

(1) 第60巻第1号

① ジャーナリズム・コミュニケーション

「地域新聞の利用動機および非利用の理由が地域新聞利用行態に及ぼす影響：嶺南・湖南・忠清地域民調査を中心に」（ファン・ソンウク、崔ホンリム、ペ・ジヒャン）は、釜山、蔚山、慶南、大邱、慶北、光州、全羅、大田、忠清の4地域の住民1674名を調査し、オンライン、オフラインによる地域新聞ニュースの利用について分析した。「暴力犯罪報道が子どもに与える情緒的および認知的影響：恐怖反応の媒介的役割を中心に」（ユ・ウヒョン、チョン・ヨングク、チョン・ジヒ）は、暴力犯罪報道が、子どもにあたえる情緒的（心理的外傷および犯罪に対する恐怖）および認知的（犯罪被害の可能性知覚および犯罪発生率知覚）影響を明らかにした。「地域新聞発展基金支援のための地域民中心の地域新聞評価尺度構成に関する探索：専門家デルファイ調査を中心に」（チョン・ソンホ、李ファヘン、李ジョンギ）は、地域新聞発展基金の支援政策について、受け手の観点から分析した。「政治的理念性向による政派的新聞露出：世論指導層としてのコラム寄稿者と一般

*こばやし そうめい 日本大学法学部新聞学科 専任講師

大衆比較研究」(白ヨンミン、金フィジョン、韓ギョソプ、チャン・スルギ、金ヨンソク)は、新聞社にコラムを寄稿する外部執筆陣と一般新聞利用者が、どのように政派的メディアを利用しているのか、その行態を解明した。「フランシスコ法王の訪韓と韓国社会の危機兆候：法王訪韓関連言論報道に対する批判的言説分析」(リュ・ウンジェ、崔ジンホ)は、2014年に起きたフランシスコ法王シンドロームに内在する社会的欲望と言説政治について、政治的リーダーシップの不在に起因する韓国社会での危機の兆候という文脈から分析した。「経済情報に対する非対称的反応：経済ニュースへの経済主体の心理と行為」(李ワンス、朴ヤンス)は、個人や企業のような経済主体が、メディアによる経済情報に触れた際、今後の景気展望について、どのように異なった認識や反応を見せるのかについて分析した。「儀礼としてのジャーナリズム：韓国ジャーナリズムの政派性についての新たな理解」(朴ヨンホム、金ギョン)は、今日の韓国ジャーナリズムが有する政派性問題について、これまで看過されてきた文化的要素の観点から検討し、韓国社会におけるジャーナリズムの儀礼的な役割という新たなアプローチを提案した。「我々は平素、原子力の安全問題をどのように扱ってきたのか：報道資料と言論報道比較を通じた「原子力安全の現実」探索」(崔ユンジョン)は、原子力安全委員会の報道資料と、メディア報道を比較することで、それぞれによって構成される「原子力安全の現実」とは何かについて明らかにした。

② ニューメディア

「計画された行動理論を根拠とするサイバーいじめ行為意図予測要因：集団別(青少年、大学生および社会人)分析」(ユ・ジェウン、チョ・ユンギョン)は、サイバーいじめに対する態度、主観的規範、認知的行為統制感が、サイバーいじめ行為意図に及ぼす影響について分析した。

③ PR・広告

「障害者支援メッセージに対する反応に好惠的／共感的訴求と利他的性向(共感的関心／観点受容)が、及ぼす影響に関する研究」(李スンジョ、金ボンゲン)は、障害者支援キャンペーン伝達において、訴求類型(好惠的／共感的)と、利他的性向(共感的関心／観点受容)が及ぼす影響を解明した。

④ 理論・方法

「電送理論を根拠とする文化開発効果の人とモデル分析：オーディション番組が青少年の垂直的個人主義におよぼす影響を中心に」(李ソクジョン、陸ウンヒ、崔テフン、朴スジン)は、オーディション番組の主な視聴者であり、社会的価値を形成していく段階にある青少年に着目し、オーディション番組の視聴が、彼ら・彼女のなかで、競争を重要と考える垂直的個人主義を、いかに生み出していくのかについて分析した。

(2) 第60巻第2号

① ジャーナリズム・コミュニケーション

「選択的ニュース利用：政派的选择性とニュース選択性の原因と政治的含意」(閔ヨン)は、ニュース消費における選択性が増大していることに注目し、政派的选择性とニュース選択性の原因

と、その政治的効果について検討した。「日帝強占期・韓ギオクの言論活動と民族運動」(朴ヨンギユ)は、これまで十分に検討されてこなかった言論人・韓基億の植民地期における言論活動と民族運動について分析した。「政治ニュース・フレームと受容者の解釈的フレームが、科学技術の意見形成に及ぼす影響：セウォル号惨事のなかの「ダイビング・ベル」投入に関するナラティブ解釈モデルの経験的検証を中心に」(チョン・チャンヨン、金チュンシク)は、ニュース・フレームが、科学技術イシューに対するニュース受容者の解釈と意見に及ぼす影響を検証した。「ニュース書き込みに対する偏向知覚がイシューへの世論知覚に及ぼす影響」(チョン・ジウン、朴ナムギ)は、多様な意見を含む書き込みがあらわれたとき、その書き込みをどのように知覚するのかによって、イシューに対する世論知覚の方向が、いかに変化するのかについて検証した。「視聴者の世帯形態は、フード番組の視聴効果発生過程に、どのような影響を与えるのか？：調節された媒介過程モデル検証を中心に」(ホン・ジャギョン、白ヨンミン)は、フード番組の視聴が、視聴者に、どのような心理的欲求を充足させ、主観的な幸福感の増進に寄与するのか。そして、こうしたフード番組が視聴効果の発生過程が、視聴者の世帯形態によって、いかに異なっているのかを実証的に解明した。「1960年代の言論人・朴権相の言論学研究についての考察」(金ヨンヒ)は、1960年代の言論人である朴権相の言論学研究について考察し、韓国言論学研究史における意味を検討した。「意味ネットワーク分析を利用した2005～2014年の自殺報道分析：＜朝鮮日報＞と＜ハンギョレ＞を中心に」(金テオク、崔ミョンイル)は、2005年から2014年までに発行された＜朝鮮日報＞と＜ハンギョレ＞に掲載された自殺報道記事について意味ネットワーク分析を行うことで、韓国社会において重要な社会問題となった自殺問題について検討した。「ソーシャル・ネットワーク・サービス利用者の没入が、利用低下に及ぼす影響：フェイスブックとインスタグラムの違いから見た関係負担の媒介効果」(李チェイ、金ヨンジョン)は、ソーシャル・ネットワーク・サービスの利用低下が、フェイスブックとインスタグラムの利用者のあいだで、どのように異なっているのかを分析した。「メディア・メッセージ効果知覚の正確性検証：世論調査結果と報道による実際の態度変化と知覚された態度変化の比較」(許ユジン、チョン・ソンウン)は、メディア効果知覚の正確性に関する既存研究の検証方法と結果を批判的に検討し、実際の態度変化と知覚された態度変化の比較を通じて、メディアの実際の効果と知覚された効果との相違を検証した。

② ニューメディア

「政治的理念によるツイッター空間での集団間の意見相違分析：セウォル号事件を中心に」(チョン・ヒョジョン、ペ・ジョンファン、ホン・スリン、朴チャンウン、ソン・ミン)は、ツイッター空間において、同様の傾向を持つ利用者間で同質的ネットワークが形成されることを前提として、セウォル号事件についてのツイッター利用者の政治的意見の相違を分析した。

③ 放送・コンテンツ・文化

「外国人留学生の行動意図に影響を及ぼす要因間の経路分析研究」(金ヨンギ、金チャンソク、文ソニイ、朴ジンス)は、在韓外国人留学生の行動意図に影響を及ぼす要因間の経路を分析した。「総合編成チャンネルの北朝鮮イメージ生産方式：「日常」への転換、理念的定形の固守」(パン・フィギョン、李ギョンミ)は、総合編成チャンネルの脱北民が出演する娯楽番組が、どのように北

朝鮮イメージを作り出しているのかについて検討した。

④ 理論・方法

「肥満の責任に帰するメッセージと感情が政策支持と健康行動意図に及ぼす影響：帰因理論と計画された行動理論を中心に」(金スジン、車フィウォン)は、構成された原因と解決の責任に帰するメッセージが、肥満解決のための健康行動に及ぼす影響を検証した。「総合編成チャンネル導入によるTV放送の多様性変化研究：メイン視聴時間帯の放送番組ジャンルの多様性と視聴者露出の多様性分析(2011～2015)」(ソン・インドク)は、地上波および総合編成チャンネルがメイン視聴時間帯に提供した放送番組の編成および視聴率資料をもとにして、総合編成チャンネル導入による主要放送チャンネルの番組編成パターンの変化と、それによる放送番組ジャンルの多様性の変化について実証的に分析した。

(3) 第60巻第3号

① ジャーナリズム・コミュニケーション

「対人コミュニケーションにおける嘘を手がかりとしての視線回避：対話段階別の視線回避の役割と機能を中心に」(金デジュン)は、普遍的な嘘を手がかりとして知られた視線回避が、審問という特殊な対人コミュニケーションの状況で、どのように実際に嘘の手がかりとなるのかについて解明した。「韓国のMARS事態は、どのように政治化されたのか?：健康統制領域の認識性向が、MARS被害関連の責任帰因に及ぼす効果に対する政治的性向の調節効果を中心に」(チャン・ギョウン、白ヨンミン)は、人が健康関連の信念と政治関連の信念が、どのような関係を有しているのか。そして、こうした信念が2015年の韓国でMARS感染が広がった事態の原因についての認識と責任の所在の判断に、いかなる影響を及ぼしたのかを明らかにした。「敵対的メディア知覚が行動意向に及ぼす影響：政治的アイデンティティの顕著性と情緒、イシュー関与度の役割を中心に」(金ヒョンジョン)は、外集団メディアに対する敵対的メディアの知覚が、政治的アイデンティティが顕著な場合、強化されるのかについて検証し、敵対的メディアの知覚が、行動意向にいたる過程で情緒とイシューの関与度の役割について探索した。「国内テレビ・フォーマット番組の流通に関する研究：完成番組との比較を中心に」(チョン・ユンギョン)は、2012年から3年間の韓国のフォーマット番組の輸出増加率、輸出市場集中度、輸入フォーマット制作国の集中度分析を通じて、フォーマット番組の流通が、完成番組の流通と、どのような違いを示しているのかについて分析した。「ジャーナリズムの観点から見たモバイル基盤のポータル・ニュースのゲートキーピングと利用者のニュース利用」(金ギョンヒ)は、モバイルでサービスされるポータル・ニュース価値と編集の独自性、ニュース編集が利用者のニュース利用に及ぼす影響について考察した。「外国人犯罪についての言論報道が、外国人真犯人認識の形成に及ぼす影響」(朴ソンジョ、朴スンガン)は、韓国社会の移住外国人に対する真犯人認識が、犯罪発生統計の客観的事実を根拠とするのではなく、韓国メディアの移住外国人犯罪報道によって形成され、強化される点について明らかにしようとした。「オンラインとオフライン新聞の引用適切性比較：述語客観性と取材源の水準を中心に」(李ゴンホ、高フンソク)は、記事の引用句に用いられた「述語客観性」と「取材源の水準」(透明度と信頼度)を通じて、オンライン(<オーマイ・ニュース>と<ニューデیلیー>)

とオフライン新聞（＜朝鮮日報＞と＜ハンギョレ＞）の情報の方向性が、どのように具現されるのかについて把握しようとした。

② ニューメディア

「青少年のオンライン有害情報露出とオンライン逸脱行動に及ぼす要因：父母の仲裁と同年代の策動の違い」（李ヘミ、ヤン・ソウン、金ウンミ）は、デジタル環境で青少年が直面するオンライン上の多様な危険性に影響をおよぼす要因を幅広く分析し、オンライン有害情報露出および逸脱行動において、父母と同年代の人々の相反した役割と、そうした役割が、不備と同年代の人々との関係のなかで、いかに作用するのかを解明した。「社会不安と対人不安が、社会参与に及ぼす影響：社会比較と情報追窮の媒介効果を中心に」（権イェジ）は、ネットワーク社会の市民性が、伝統社会と異なり、個人の感情が重視されるという点に着眼し、社会不安および対人不安が、社会参与に及ぼす影響を把握した。

③ 放送・コンテンツ・文化

「歴史トークショーのジャンル混種化：KBS1 ＜歴史ジャーナル その日＞分析を中心に」（李ジョンズ）は、歴史トークショーという混種的なジャンルにおいて、歴史を扱うスタイルが、どのように変化しているのかを考察した。「テレビ芸能あるいは娯楽番組の司会者および出演者の問題言語使用が、番組に対する興味と視聴者の暴力性向に及ぼす影響」（ウォン・ギボム、文ソンジュン）は、テレビ放送の芸能または娯楽番組の司会者および出演者が、使用する問題のある言語が、視聴者の態度変化に、どのような影響を及ぼしているのかについて実証的に分析した。

④ PR・広告

「企業—女性職員間の関係性モデルに関する影響：性別多様性の気風と離職意図との媒介変因としての関係性」（金ヒョスク）は、現在までの関係性の研究成果を継承・発展させるための一環として、「組織—公衆間の関係性モデル」を企業と女性職員の関係性に適用し、分析を試みた。

⑤ 理論・方法

「中国人移民者のメディア利用と文化価値」（文ソンジュン、ウォン・ギボム、ウ・ブン）は、中国移民者の韓国メディア利用が、彼ら・彼女らの文化価値形成に対して、どのような影響を与えるのかについて実証的に分析した。

(4) 第60巻第4号

① ジャーナリズム・コミュニケーション

「質的メタ分析を通じたニュース・フレームの類型：国内117のフレーム研究を対象として」（李フィヨン、金ジョンギ）は、現在まで、韓国国内のニュース・フレーム研究で蓄積された類型を統合し、調査分析を試みることで、4つの次元で15種類のニュース・フレームを導き出した。「多文化の再現と移住民メディア利用と社会関係およびアイデンティティ：済州結婚移住女性の声を中心に」（ジョン・ウィチョル、チョン・ヨンボク）は、済州地域に暮らす結婚移住女性への聞き取り

調査を通じて、彼女らのメディア利用、社会関係、アイデンティティについての解釈を試みた。「日帝強占期ニューヨーク韓人言論の特性と役割：ディアスポラ的アイデンティティを中心に」(朴ヨンギュ)は、日本植民地期にニューヨークで朝鮮人が発行していた新聞・雑誌に着目し、それらが、どのように民族アイデンティティを維持させ、母国との連帯のなかで活動していたのかを分析することで、強力なディアスポラのアイデンティティが埋め込まれていたことを浮き彫りにした。「言論史研究対象と範囲を大きく拡大する：車培根の言論史研究」(金ヨンヒ)は、車培根の研究業績のなかで、言論史研究を中心にして、主な研究内容と成果を詳細に検討し、韓国言論学研究史における意義について考察した。「火のない所に煙は立たないか?：政府機関の噂に対するインターネット公衆の介入と責任間の関係探索」(車ユリ、権イェジ、羅ウンヨン)は、政府機関に関する噂への介入要因を基盤として、インターネット公衆を類型化し、該当の類型によって、噂の発生問題の責任に違いがあるのかについて検証した。「段階的順応技法比較および段階延長研究：多文化学生のための大学生メンター募集への適用」(車ドンピル)は、多文化学生のための大学生メンター募集で、段階的順応技法のうち、どの技法が、より効果的なのかについて分析した。「国内言論のSTAP細胞事件報道態度：ファン・ウソク報道の「教訓」の失踪原因分析を中心に」(金ハンビョル、チン・ダルヨン)は、2014年のSTAP細胞事件に関する報道について、2005年のファン・ウソク事件と比較し、分析することで、「ファン・ウソク報道の教訓」が生かされていない原因が、どこにあるのかについて検討した。「1994~2014年 韓国経済ニュースの変化：言論の監視機関の役割を中心に」(李ナヨン、白カンヒ)は、韓国言論の財政的危機が、急速に進む最近20年間の韓国における経済ニュースが、どのように変化したのかについて、言論の監視機関の役割を基準に分析した。

② ニューメディア

「外向性と年齢帯によるコミュニケーション空間認識の相違：空間知覚、時間配分およびネットワーク性と共存感を中心に」(羅ウンヨン、権イェジ)は、個人の内向性-外向性と世代によって、コミュニケーションのための視空間知覚と公共の場所での没入、連結性と共存感および複合時間性が、どのような違いを有しているのかについて分析した。「セット販売による市場支配力転移に関する探索的研究：SKテレコムとCJハロービジョン間の混合型企業セットの事例を中心に」(カン・ジェウォン)は、「混合型企業結合とセット販売による市場支配力転移」問題について多層的で統合的なアプローチを通じて分析した。

③ 理論・方法

「<セウォル号特別法>に対する意見構成で死の顕著性が、意見激化と利他的行為意図に及ぼす影響：心理的距離と集団主義の調節効果を中心に」(金ヨンウク、李ジヨン)は、セウォル号事故について、特別法への意見が激化する現象を恐怖管理理論の文脈で診断し、セウォル号犠牲者に対する利他的行為の意図に死の顕著性が、どのような影響を与えているのかについて実証的に分析した。「青少年の芸能人に対する関心と摂食障害：芸能人崇拜概念を中心に」(シム・ジェウン、ファン・ジェウォン)は、男女高校生各250名を対象にオンラインアンケートを実施し、「芸能人崇拜」が、青少年の摂食障害に及ぼす影響について分析した。

(5) 第60巻第5号

① ジャーナリズム・コミュニケーション

「ゲーム中毒既成法理に対する批判的考察：保健福祉部の精神健康総合対策に対する憲法的判断を中心に」(朴ヒョンア、李ジェジン)は、既存のゲーム中毒関連法案および最近の保健福祉部によって協力を推進されている精神健康総合対策のうち、ゲーム中毒と関連した項目について検討した。「取材源使用の原則と現実：セウォル号報道を中心に」(ソン・サンゲン)は、「朝鮮日報」「東亜日報」「ハンギョレ新聞」「京郷新聞」の総合面の記事とKBSおよびJTBCの午後9時のニュースについて内容分析を実施し、セウォル号事件報道について、取材源に着目して分析した。「政治家に対する事前態度が、属性議題設定効果に及ぼす影響についての研究：第18代大統領選挙における大学生有権者を中心に」(李ナヨン)は、属性議題設定理論を基にして、政治家についてのニュース報道の影響力が、当該政治家への受容者の選好程度(事前態度)によって、どのように異なるのかについて分析した。「国内デジタル・ニュース議題の流れに対するマクロ的分析：伝統的マスコミ、インターネット・マスコミ、ソーシャル・メディアを中心に」(イム・ジョンソプ)は、デジタル・ニュース市場を主導するマスコミとソーシャル・メディア間の議題設定についてマクロ的に分析し、媒体間の議題設定の性格を診断した。

② ニューメディア

「SNS利用と政治参与：政治的社會資本と情報および娯楽追求動機の調節された媒介効果を中心に」(崔ジヒャン)は、社會資本という概念とSNS利用動機に着目し、SNSが、いかなるメカニズムを通じて、市民の政治参与に意味ある影響をあたえるのかについて分析した。「オンライン嫌悪表現の拡散ネットワーク分析：イシューの属性別拡散パターンおよび嫌悪表現の類型と強度」(ホン・ジュヒョン、羅ウンギョン)は、インターネットとSNSを通じて、特定の対象に対する嫌悪表現が増加する現象に注目し、嫌悪表現の対象者を統制する可能性と被害の範囲を基準として類型化し、検討作業を実施した。「フェイスブックの友達のニュース推薦が、ニュース信頼度認識とニュース関与行動に及ぼす影響：認知精巧化認知指導力を中心に」(金ミヒ)は、オンライン実験を実施し、フェイスブックの友達によるニュース推薦が、フェイスブック利用者のニュース信頼度意識とニュース関与の行動に及ぼす影響を検証した。「プライバシー関連要因が、フェイスブックの持続的利用意向に及ぼす影響についての拡張モデル研究：オンライン・リスク管理戦略の防護集団と主導的対処集団の潜在平均経路分析を中心に」(チョン・ヘソン、李ヒョンジュ、金ギテ)は、構造幫助式モデルを適用し、フェイスブックのプライバシーの危険認識—プライバシー念慮—信頼—持続的利用意向の構造的関係を分析し、オンライン・プライバシーの危険管理戦略の防護集団と主導的対処集団の潜在平均相違分析と調節効果を実証的に検証した。「教育目的の著作物利用の公正利用判断要素：米国判決の性向および含意」(チョ・ヨンア)は、アメリカの判例を対象として、教育目的における著作物の公正利用についての判断要素を分析した。

③ 放送・コンテンツ・文化

「メディア利用としてのゲーム利用：「何を」するのかから「どのように」するのかへ」(金ウンミ、李サンヒョク)は、ゲーム利用者が、ゲーム内でどのような行動を選択するのか、それによっ

てメディア経験が、どのように異なるのかに着目し、「行うもの」としてのゲーム利用が有する意味について分析した。「コミュニティ・ラジオ銅雀FMの多重参与と実践事例研究：ネグリとハート、ヴィルノの多重理論を中心に」(カン・ジンソク、ソ・ユソク)は、ソウル・銅雀FMの多重実践と情緒変移の事例を分析することで、コミュニティ・ラジオの含意について検討したものである。

④ PR・広告

「国内自殺予防ウェブサイトについての分析：健康信念モデルの適用」(アン・スンテ、李ハナ)は、健康信念モデルの5つの要因を理論的枠組として使用し、韓国内の自殺予防ウェブサイトを分析することで、自殺と精神疾患についての知覚された深刻性、脆弱性、恵沢、障害要因に関する情報提供が不足していることを明らかにした。

⑤ 理論・方法

「長期時系列内容分析のためのニュース・ビッグデータ分析の活用可能性：100万件の記事の情報源とテーマで見た新聞26年」(朴テミン)は、本格的な長期時系列研究を遂行するために、自然語処理と意味ネットワーク分析が組み合わせられたニュース・ビッグデータを活用することの提案を行った。

(6) 第60巻第6号

① ジャーナリズム・コミュニケーション

「‘Nudge Communication’の方法論的類型分類：公益的説得のためのナッジの活用方案」(カン・ジュンマン)は、韓国の日常的な生において、ほとんど無限の適用範囲を有するナッジ(Nudge)をコミュニケーション学が、積極的に取り扱うべき点を強調し、‘Nudge Communication’の類型を分類すると同時に、公益的説得のためのナッジの活用方案について探求した。「身体イメージ関連ニュースおよび書き込みの論調が、女子大生の身体イメージに及ぼす影響」(金キョンボ)は、20代の女子大学生を対象として、オンライン・メディア環境において、人の外貌に関する信念の学習が、どのように否定的な自己身体イメージ評価がなされるのか、その過程について分析した。「新聞、放送、ポータル・メディアの意見多様性比較分析：「統合進歩党解散宣告」関連報道を中心に」(ノ・ヒョンジュ、ユン・ヨン Chol)は、多元化された言論生態系において、韓国言論(新聞、放送、ポータル)の意見の多様性が、媒体内、そして媒体間で、どのようにあらわれているのかについて分析した。「父母と子女間の意思疎通行為に対する知覚相違が、子女の感情調節および認知的意思疎通能力に及ぼす影響」(リュ・ソンジン)は、父母と子女との多様な意思疎通行為に対する知覚において、統計的な有意味な差の有無について分析し、知覚の相違が、子女の感情調節および認知的意思疎通能力に、いかなる影響を及ぼすのかを検証した。「信頼の条件：ジャーナリズム専門性と党派性が偏向性が言論信頼の政治信頼に及ぼす影響」(閔ヨン)は、言論に対する不信という状況が広まるなかで、言論への信頼が、どのような原因と結果によって構成されているのかについて、19歳以上の成人に対するオンライン調査を用いて検討した。「放送の客観性に対する研究：法律的観点を中心に」(朴アラン)は、放送通信審議委員会の審議議決のうち、

「客観性」違反が制裁の事由となった場合を調査し、客観性は法的に、どのような意味を有するのかについて分析した。「多変化したニュース消費が議題一致度（consensus）に及ぼす影響」（ソン・ボヨン、金ウンミ）は、議題設定に影響を及ぼす受容者の変因のうち、利用者のニュース消費パターンに注目し、メディア環境の変化とともに観察されるニュース消費パターンと議題設定効果の結果として公衆議題一致度の関係を分析することで、公衆の議題一致度が増加している現象を議題設定理論を通じて解明した。「＜毎日新報＞の「婦人と家庭」欄を通じて見た1920年代序盤の「婦人」への視線」（李ミンジュ、崔イスク）は、韓国最初の婦人欄である「毎日新報」の「婦人と家庭」欄を対象として、同欄が、いかなる背景で登場しどのようなイシューを通じて、当時の女性を規定しようとしたのかについて分析した。

② ニューメディア

「SNSにおける潜伏観察行為と利用強度に及ぼす影響要因分析：フェイスブック利用者の性格および心理的特性を中心に」（チョン・ソンウン、朴ナムギ）は、SNS利用者の性格および心理的特性が、SNSで発生する潜伏観察行為とSNS利用強度に、いかなる影響を及ぼすのかについて分析した。

③ 放送・コンテンツ・文化

「国内児童虐待ニュースに対する批判的言説分析：「ウォンヨンイ事件」を中心に」（金ヘヨン、カン・ジンスク）は、児童虐待ニュースについての批判的言説分析を通じて、社会的阻害階層であり、少数者である子どもの劣悪な生の環境と暴力現象を批判し、対応策を模索した。

2. 『韓国言論情報学報』

(1) 通巻 75 号

「SBS＜それが知りたい＞の役割と成就、そして明と暗を文脈化する：テキスト分析とメディア生産者研究を通じて光をあてる」（李ギヒョン、ファン・ギョンア）は、SBSが放送する時事告発番組＜それが知りたい＞の役割や制作陣が直面する制度的な圧迫と影響について多面的に光をあてた送り手分析の研究である。「男性のブランド消費と差異の文化政治：韓国社会の30代男性の消費経験を中心に」（リュ・ウンジェ、朴ジョンウン）は、韓国社会における男性のブランド消費が持つ社会文化的意味と、個人がブランド品に、いかなる意味を付与し、これを消費する過程で、どのような経験と実践を行うのかについて分析した。「移住女性に関する嫌悪感情研究：ダウム・サイト「アゴラ」言説を中心に」（韓フィジョン）は、討論の空間である「ダウム」の「アゴラ」に着目し、移住女性に関するインターネット・ポータルサイトの掲示物と書き込みのナラティブに込められた感情の特性を分析した。

(2) 通巻 76 号

「グレマス記号学を利用した叙事分析の問題：＜冬の王国＞を中心に」は、＜冬の王国＞の叙事分析を行った既存論文の間違いを指摘し、＜冬の王国＞が、家族のなかで愛を最高の価値として示し、既存の体制順応的イデオロギーを再生していることを明らかにした。「南韓の対北放送専門家

が持つ統一過程における放送の役割についての認識研究：Q方法論を利用した北韓自由放送論と南北交流協力放送論の差異の究明」(チョ・スジン、李チャンヒョン)は、韓国の対北朝鮮・放送専門家が、南北朝鮮の統一過程における放送の役割について、どのような認識を持っているのかについて分析した。「韓国の原発に対する新聞報道フレーム変化研究：日本・福島原発事故前後の比較」(シム・ウンジョン、金ウイグン)は、福島原発事故前後を比較し、韓国の原発報道の一般的特性と報道フレームの相違について、中央の日刊新聞と原発所在地域の日刊新聞について内容分析することで明らかにした。「犯罪ニュース露出と多文化受容性：危険知覚の媒介効果を中心に」(ホ・ユン Chol、イム・ヨンホ)は、外国人犯罪に関するニュースの接触が受け手の多文化受容性に、どのように影響するのかについて、体系的に究明した。「記事削除請求権新設の妥当性検討：忘れられる権利を中心に」(ムン・ソヨン、金ミンジョン)は、忘れられる権利の概念と、その保護法益、そして韓国における表現の自由を規制する法律を検討し、記事削除請求権新設の妥当性について検討した。「自ら「行動する」美術家たち：自立的美術新生空間主体の生活経験と芸術実践研究」(シン・ヘヨン)は、韓国の美術生産の場で出現した自立の新生空間に着目し、当該空間の主体が有する生活経験と芸術実践について検討した。「中国文化崛起の逆説」(金スンス)は、中国の文化産業が韓国の文化市場に進出し、多くの変化を引き起こしている現象について、中国の文化市場とメディア政策を分析することで明らかにした。

(3) 第77号

① 企画論文・意見志向ジャーナリズムの新たな浮上と民主主義の危機

「総合編成チャンネル・ジャーナリズムの批判的照明：時事トークショー政治媒介エリートのテレビ政治」(李ヨンジュ)は、総合編成チャンネルの代表的な番組である時事トークショーが、政治媒介エリートによる政治的偏向性と感情の表出によって、どのように政治化されていったのか、テレビ政治の効果を読みといた。「植民地「メディア効果論」の構成：大衆統制技術としてのメディア「影響言説」」(ユ・ソンヨン)は、「植民的メディアの影響言説」が、当初から統治の問題であり、商業的消費大衆と抵抗的群衆統制のための言説であったことを解明した。「民主主義の危機と言論の扇情的党派性の関係についての試論：チャンネルAとTV朝鮮の政治時事トークショーを中心に」(李ジョンフン、李サンギ)は、チャンネルAとTV朝鮮の政治時事トークショーが、特定政党と政治家、特定集団だけを対象として憤怒や嫌悪のような激烈な否定的感情を呼び起こすスタイルに注目し、これらの番組が有する意味や構造を分析した。

② 一般論文

「太極旗掲揚台というヘゲモニー国家装置論序説」(チョン・ギュチャン)は、特定の場所に設置され、空間を実体的に掌握し、可視化されることで、一般の人々の視覚を支配する太極旗掲揚台を、国家イデオロギー政治の一様態としてとらえ、その意味を分析することで、支配の効果や抵抗の可能性について論じた。「総合編成チャンネルの浮上と娯乐的政論場の形成：政治-メディア体系間の構造的接触の新たな様相」(チョン・ジュンヒ)は、韓国の総合編成チャンネルが、たんにメディア産業内部での経済的效果に限らない広範な社会的影響力をおびたジャーナリズム機構に成長したとみなし、その社会政治的特性を究明した。「韓国における新聞用紙の社会経済史：市場の

力学を中心に」(ユン・サンギル)は、新聞用紙の需給状況に対する経済史的観点と、新聞用紙市場の行為者(国家、停止業者、新聞業者)への社会史的な観点から、光復後の韓国における新聞用紙市場のダイナミクスを解明した。「テレビ芸能番組のなかの多文化主義:JTBC <非首脳会談>の「君が代」論乱を通じてみた多文化主義言説の脆弱性研究」(金テヨン、ユン・テジン)は、JTBCの番組<非首脳会談>に挿入された「君が代」をめぐる論乱で、メディアが再現/構成する多文化主義言説に対して、反日、民族、国家、平和など多様な概念が介入するとき、どのような言説構造的変化が生じるのかを解明した。「初期釜山のノレバン(カラオケ・ボックス)文化形成の社会的文脈とメディア史的意味:1980年代カラオケ文化との関係を中心に」(ユン・サンギル、チャン・イル)は、日本産カラオケが釜山に流入した社会経済的背景を検討し、1980年代釜山地域を中心に広まったカラオケ文化が、1990年代のノレバン文化の台頭に、いかなる関連性を有していたのかについて解明した。

(4) 通巻 78 号

「ソーシャル・メディア環境での危険イシューの露出と社会資本が危険認識に与える影響」(クァク・ウンア、崔ジンホ、韓ドンソプ)は、ソーシャル・メディア環境で、受け手の現実危険認識に影響を与える要因について分析した。「地域放送の内部植民地は、どのように作動するのか:社長選任など支配構造分析と改善方案」(金ジェヨン、李スンソン)は、1990年代中盤から2015年までのMBC地域系列局17社と地域民放9社の社長と株主・理事の構成を分析し、地域放送の内部植民地実態について分析した。「コミュニティ・ラジオと地域共同体構成員の相互作用についてのフィールド研究:麻浦FMの事例を中心に」(パン・ミョンジン、金ヨンチャン)は、麻浦FMについての事例研究を通じて、オルタナティブ・メディア、テクノロジー、そしてコンテンツ中心の議論にかたよっている既存のコミュニティ・ラジオ研究の限界を乗り越えようとするものであった。「MARS関連の危険情報探索と処理がMARS予防行動に与える影響:危険情報探索処理モデルの拡張とSNS利用程度にともなう調節効果を中心に」(ソ・ミヘ)は、2015年のMARS危機のなかで、同一の応答者を対象に行われた二度のオンライン・パネル調査結果を利用し、個人の危機関連情報探索処理に及ぼす要因と、危険情報探索処理が、いかに危険防止行動に肯定的な影響を及ぼすのかについて検証した。「Theil指数と移動指標を活用したメディア市場構造分析:全国総合日刊紙市場を中心に」(オ・ジョンホ)は、2001年から2015年までの韓国の日刊紙産業における市場構造の変化を分析した。「地域新聞記者のキャリア移動研究」(イム・ヨンヒ)は、地域新聞記者の職業移動を通じて、地域言論の現実と記者の職業アイデンティティの変化を検討した。「1950年代韓国におけるアメリカの図書翻訳事業の展開と意味」(車ジェヨン)は、1950年代のアメリカ政府が文化冷戦のさなかで、広報外交の一環として海外で実施した図書プログラムの全体的な輪郭を検討し、韓国で実施されたアメリカによる図書翻訳事業の展開過程と目的、内容を分析することで、事業の成果と意味を解明した。

(5) 通巻 79 号

「知識を通じた政治あるいは政治のための知識:言論学者の政治参与現況と特徴研究」(金ソンヘ、ソボユン、チン・ミンジョン、カン・グクジン)は、メディア関連法と、これを根拠として設

置された各種理事会および委員会を調査することで、韓国のメディア・ジャーナリズム研究者が、どのようにして政治に参加しているのか、そのメカニズムについて明らかにした。「言論が産業災害を報道する方式に関する研究：サムスン白血病事態の場合」(パン・フィギョン、ウォン・ヨンジン)は、サムスン白血病事態についての言論報道に焦点をあて、言論が産業災害を報道する方式について検討した。「メディアとしての bot：ニュース・チャット bot についての試論的論議」(オ・セウク)は、新たな技術であるニュースチャット Bot の意味と作動方式、そして展望について、メディアの観点から試論的に分析した。「安倍内閣の日本の過去史認識問題についての韓国言論の視角：保守新聞と進歩新聞にあらわれた報道フレームの逆動的過程」(李ワンス、ベ・ジェヨン、朴キョンウ)は、韓国言論が、安倍政権発足後、過去史問題についての日本の立場に対して、どのように反応し、対応したのかを明らかにした。「モバイル時代の記事の長さに関する探索的研究」(チョン・ヨング、チョン・イェヒョン、郭亜奇・李プルム)は、コンピューティングと移動通信が結合し、完全に新たな趣向のコンテンツが作り出されているモバイル時代にあう記事の長さは、どのくらいなのかという問いに答えるものであった。「嫌悪性書き込みの第3次効果：書き込みの属性と利用者の性向を中心に」(チョ・ユンヨン、イム・ヨンホ、ハ・ユン Chol)は、オンライン・ポータル・ニュースについてのヘイト書き込みの第三次効果が、ニュース利用者の性向によって、どのように異なっているのかを解明した。「親日清算についての米軍政期<東亜日報>と<朝鮮日報>の報道態度」(チェ・ベク)は、米軍政期において、<東亜日報>と<朝鮮日報>が、親日清算問題について、どのように報じてきたのか、その報道態度を分析した。「テクノロジー、労働、そして生の脆弱性」(チェ・ソクジン)は、自立主義マルキストらの論議を基盤として、新自由主義社会における情報通信技術、労働、社会的関係の変化について論じた。

(6) 通巻 80 号

「メディアと不平等の弁証法」(金スンス)は、不平等とメディアの関係を考察することで、経済的・国家的・理念的の不平等が、社会の性格を左右し、このことが、メディアの不平等の根源になっていることを指摘した。「[ヘル朝鮮現象]の特徴と含意を分析する：保守言論と進歩言論間の再現作用についてのテキスト分析を中心に」(金エリン、イム・ヘビン、チャン・ハンスルほか6名)は、政派性の異なる主要メディアに掲載された「ヘル朝鮮」関連記事と寄稿文、特集をテキスト分析することで、「ヘル朝鮮」現象が有する複合的な側面と、その含意を探究した。「アイドルをとりまくジェンダー化された Schadenfreude の文化政治学：<IU 事態>を中心に」(金ヒョンギョン)は、IU4 集のアルバム発売を事例として、女性アイドルに対する否定的な大衆感情の内容と論理を明らかにした。「オンライン上の個人情報露出についての認識と保護態度研究：ビッグデータ時代の個人情報露出についての心理的反発に注目して」(金ヒョンジ、チョン・ウンシク、金ソント)は、未来の新たな競争力としてのビッグデータの価値が、個人の人権を侵害し、優先されてはならないという前提のもとで、オンライン利用者の個人情報露出に対する認識と保護、態度について検討した。「社会的トラウマの個性化と治癒のためのメディア・セラピーの可能性研究：戎 (Jung) の集団無意識と個性化の自由を中心に」(ユ・スク、カン・ジンスク)は、セウォル号惨事による社会的トラウマ現象を分析し、メディアを通じたトラウマ・セラピーの意味と限界を探究した。「1960年代前半期韓国の有線放送事業の運営と全国有線放送協会活動の意義」(ユン・サンギル)

は、1960年代前半期における韓国の有線ラジオ放送事業の運営と変容過程について、1963年12月に開始された全国有線放送協会の活動を中心に描いた。「私学非理についてのテレビニュース・フレーム分析」(李ソヒョン、崔ジンボン)は、KBS、MBC、SBS、YTN、JTBCの5つの放送局が、私学非理問題について、どのように報じてきたのかについて分析した。

3. 『言論と社会』

(1) 第24巻第1号

「『青年時代』構成の文化政治学—2010年以後、青年代言説についての批判的分析」(金ソンギ)は、2010年から2014年までの韓国における主要日刊紙の記事557件を抽出し、青年世代の言説が韓国社会で有している文化政治的意味について論議した。「メディア・サービス失敗事例研究が稀少な原因についての知識社会学的考察」(金ピョンホ、ファン・ジュソン)は、韓国社会におけるメディア技術やサービスの爆発的成長の裏にある重大なメディア・サービスの重要な失敗事例(サイワールド、衛星/地上波DMB、ワイプロ、3D放送など)に関する研究が、なぜ稀少なのかという問いに答えようとするものであった。「メディア文化のなかのフード番組(モクバン)とヘゲモニー過程」(ホン・ソクギョン、朴ソジョン)は、韓国の支配的な飲食文化の価値と伝統的アイデンティティを逸脱するインターネット・フード番組(「モクバン」)文化について、社会的コミュニケーションと飲食文化を媒介とするメディア文化の観点から考察した。「ハプティクス・コミュニケーション: インターフェイス相互感性、Haptic Embodiment、その含意」(朴ソンヒ)は、モバイル・メディア利用を身体化の観点から検討することで、人間—メディア—世界という連関が有する意味を解明した。

(2) 第24巻第2号

「朴正熙の歴史的遺産に関するメディアの記憶形成方式: メディアの理念的相違と記憶の相違比較」(李ワンス、崔ミョンイル)は、朴正熙元大統領に関するメディアの記憶方式について、死亡直後の1979年10月27日から11月5日までの期間に発行された訃報記事を分析して、明らかにした。「『危険に処する身体: 『生活習慣病』の社会的構成と危険の個人化』(ヤン・ウンギョン)は、韓国メディアにおける「生活習慣病」概念の広がり注目し、最近の健康増進言説の性格について社会文化的観点から分析した。「健康食品言説の受容に関する研究: 20~30代女性との深層インタビューを中心に」(カン・ボラ)は、韓国社会において、健康食品に関する言説が増加している状況に注目し、個人が健康食品言説について有している理解と実践の基準を分析することで、健康食品言説の社会文化的背景と、その言説を受容する特徴的な過程を捉えようとするものであった。「メディア存在論: Simondonの「個体化」を通じて見たマクルーハンのメディア論」(金サンホ)は、シモンドンの技術的対象についての哲学が、発生的で、過程的であり、関係論的である。質料形相論を批判の始まりとして、その個体化論議を始めたことは、その哲学が向かう地点を明らかにした。

「視覚技術としての幻灯と植民地の視覚性」(ユ・ソンヨン)は、言葉が抑圧され、文字に対する検閲が日常化された植民地において確立された視覚メディアの覇権的優位に着目し、視覚技術の孤立性と限界を解明しようとした。

(3) 第24巻第3号

「言論は言論らしくならねばならない！：模範的地域週刊新聞を通じて学ぶ建設的教訓」(金ソンヘ)は、韓国の地域週刊新聞が、どのように地域経済を活性化し、地域住民の立場を代弁し、自治体と権力集団を監視し、対案を模索する模範的なコミュニティ・メディアの役割を担うことができるようになったのかを分析することで、韓国のマスコミにとっての教訓を探ろうとするものであった。「親密な民俗誌学の倫理：青年世代の女性たちの脆弱な生、労働、デジタル・メディア使用を研究する」(チェ・ソクジン)は、青年世代の女性たちの生と労働の脆弱性をデジタル・メディアが、どのように媒介しているのかを分析した。「光州地域メディアの場の力学構造変化：ニュース通信社の出現を中心にした質的研究」(ハン・ソン)は、地域メディアの場に参与する内部行為者たちのなかで、主導的な役割が、だれによって、どのような方式で担われるのかについて分析した。「「ボランティア市民」になること：新自由主義生存倫理と青年世代」(金スミ)は、1990年代中盤に市民性と社会的関係が再構成される局面で、青少年ボランティア活動の制度化をめぐる公的言説が構成されるプロセスと、その意味を検討した。「脱走と模倣：1970年代青年文化の感覚と情動実践」(金イェラン)は、1970年代の青年文化について、互いに異なる位置にある青年下位文化の感覚と情動実践を通じて生成・遂行される世代的力学のなかで解釈しようとした。「メディア環境変化のなかの新聞「文化ジャーナリズム」の現況と明暗：主要日刊紙文化部記者らの深層インタビューを中心に」(李ギヒョン、金セウン、金ギョンヒ)は、マスコミの文化部記者たちの活動を中心に文化ジャーナリズムの現況と役割、そして、その複合的含意について明らかにした。

(4) 第24巻第4号

「モノドロジーとコンピュータ連算社会科学としてのメディア研究：イシューの生涯主義と社会的微粒子分析的視角」(イム・ジョンズ)は、コンピュータ化された社会科学への転換において、メディア・コミュニケーション分野のビッグデータ研究が、イシューへの注目とライフ・サイクルの分析に注目したモナドの主張に注目し、モナドの社会科学にメディア研究プログラムの新たな可能性を提案するものである。「流通者中心の映像文化運動事例研究：1990年代「最上とその次」の活動を中心に」(オ・セソプ、ハン・サンホン)は、レンタルビデオ業者など流通者に焦点をあて、彼らが担った地域の映像文化運動の展開を分析することで、1990年代の韓国における映像文化の広がりや発展を解き明かした。「デジタル労働のジェンダーに関する批判的考察：女性「フェイスブック・スター」のデジタル労働を中心に」(金エラ)は、消費資本と技術を通じて、利用者の参与活動を労働力として捉えようとするデジタル経済において、女性が、ソーシャルメディアの積極的利用者として、同時に生産者として無賃あるいは低賃金の労働力として動員されている状況について批判的に考察した。

